

歴史を捉える視座

社会科教育講座・川岡勉

この授業の対象となるのは大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修の大学院生であり，今年度の受講者は2名であった。その中には，歴史学や日本史を専門的に研究して修士論文にまとめようとする大学院生はいなかったため，広く歴史学全体をどう捉えるかというテーマで授業を展開した。

日本史特論および日本史特論演習で取り上げたテキストは，中谷功治『歴史を冒険するために 歴史と歴史学をめぐる講義』(関西学院大学出版会，2008年)，福井憲彦ほか『興亡の世界史 20 人類はどこへ行くのか』(講談社，2009年)，甚野尚志編『歴史をどう書くか』(講談社，2006年)の3冊である。

テキストの選択は，教員の側がいくつかの文献を提示して，その中から選ばせることにした。教員が一方的に指定する場合もあってよいと思うが，院生に選ばせることによってモチベーションを高める効果があったと考えられる。

授業の進め方は，あらかじめテキストを読んできて，それに基づいた報告を行ない，報告をうけて討論を進める形をとった。受講生が2名しかいないため，交互に報告の準備をしなければならず，内容を整理してレジюмеにまとめるのはかなりの労力を必要としたと思われるが，二人とも熱心に取り組んで授業に臨んでいた。

授業終了後に，アンケートをとって，①自らの授業への取り組み状況，②授業を通じて得たもの，とくに印象深かったテーマ，③改善すべき点，授業に対する注文を聴取した。

①について寄せられた声として，このような報告形式の授業は初めての経験で，授業開始当初はレジюмеの作成や文献内容確認の要領がよく分からず戸惑ったが，毎回の授業を通じて，問題点や疑問点を整理しながらテキストを読み進めることができるようになったとするものがあった。一方で，自分の理解した内容を報告できちんと伝えるという点で不十分であったとか，報告後の討論で積極的な発言ができなかった等の反省の弁も述べられていた。学部生と違って

大学院生の場合には，テキストに書かれている記述の意味を表面的に理解するだけでは不十分であり，一つひとつの言葉や文章に込められている内容をその背景まで含めて理解することが必要であり，そのためには関連事項なども事前に調べて授業に臨むなど，高いレベルでの文献読解能力が求められている。この点で，さらなる研鑽が必要であることを受講生に感じさせることができたように思われる。

②に関しては，まず，数多くの新しい知識を得られたことが楽しかったとする感想があった。そして，様々な歴史観に触れる中で，どのような立場でどのように歴史事象を見ていくかによって，全く異なる歴史の見方が生まれるということが新鮮な驚きであったようである。それは歴史学以外の分野を研究しようとする者にとっても，必要で有用な観点であろうと書いてくれている。

取り上げたテキストの中で最も印象深かったのは，二人とも『興亡の世界史 20 人類はどこへ行くのか』を挙げている。各論文を読む中で歴史事象に対する先入観が揺さぶられ，自らの中にある誤解や偏見に気づかされたと言った院生もおり，自身の思考そのものを内省する機会になったものと思われる。

③については，報告後の討議の時間には，教員の意見を聞くだけになりがちで，なかなか自らの考えを提示できなかったとする感想があった。討議の際に，もう少し院生の思考を引き出していく工夫が求められていると言えよう。また，他の授業との兼ね合いもあって，週1回の授業準備が大変だったとする率直な声も寄せられた。この点は，大学院の授業カリキュラムの見直しともからむ問題であり，教育学研究科全体や同じ専修の授業構成をどのように再編するか，考えていく必要がある。一定のスリム化を図りながら，それぞれの授業をどう有機的に関連づけ，必要な力を身につけさせていくべきかを，教員の側で議論していかなければならないであろう。